

2016年7月27日(水)

IGS 研究会(生殖領域シリーズ)

テーマ: 同性カップルの家族づくり

日本で子育てするセクシャル・マイノリティ親

青山 真侑

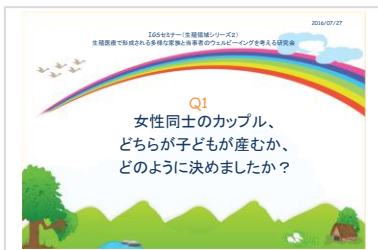
にじいろかぞく副代表

2016年7月27日現在の情報です。

1. はじめに

はじめまして。青山真侑と申します。にじいろかぞくという、LGBT の親とその支援者の会の運営スタッフをやっております。ゲイの友人から精子提供を受けて、子どもを授かりました。私自身は43歳で、パートナーは9歳年上の52歳、子どもは4歳の男の子です。二人とも都内で仕事をして、都内に住んでいます。私とパートナーは、今年16年目になるという長いカップルです。3人と犬1匹で暮らしています。

仙波: 青山さんのお話ですが、今回、私がひとつひとつ質問させていただいて、それにお答えしていただくという形式で進めさせていただきたいと思います。



仙波: 最初の質問です。女性同士のカップル、どちらが子どもを産むのかを、どのように決めましたか。

青山さん: 私自身がセクシャリティに気づいたのは、14歳だったんですけど、その時点から子どもを持ちたいと思っていました。たまたま、私が少し変わった子だったのだと思いますが、精子と卵子があれば妊娠できるはずだし、あまり夫婦仲のよくない家に育ったため、たとえパートナーが女性だったとしても、子どもにとって望ましい家族をつくることはできると考えていました。そのために必要だと思ったのは、安定した関係が築けるパートナーと、いざというときに子どもを養える経済力の2つでした。この2つが手に

入れば、あとはどうにかなるんじゃないかと思っていました。ただ、その時点では、私も子どもだったので、そのためにどう生きればいいのかは、皆目わからないし、将来、自分が本当に働き続けられるかどうか不安でしたね。

今のパートナーとは20代後半に出会いまして、付き合って3、4年目くらいのときに、なんかこの人と一生、一緒にいるのかもしれないと思いました。それで、パートナーに、実は子どもを持つのが夢なのだけれどと打ち明けました。すると、「いいんじゃない」と、すごく簡単に言ってくれました。彼女は当時40代前半でした。あまりにあっさりしているので、大丈夫かなと思いましたね。彼女はバイセクシャルで、男性と恋愛して結婚していた時期があるのですが、その頃から子どもがほしいと思ったことが一切なかったそうです。自分では産む気はないけれど、子どもに自分のミーム(meme)を伝えることには興味があって、「一緒に育ててもいいよ、是非そうしよう」というような返事でした。

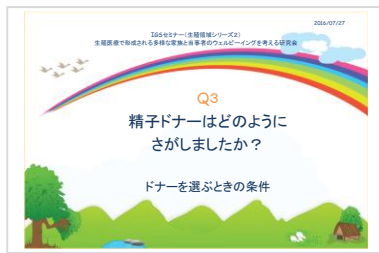


仙波：2つ目の質問です。子どもをもつことを誰に話しましたか。話をした人たちの反応はどうでしたか。

青山さん：私の父は割りと早めに亡くなっていて、結局はカムアウトするタイミングがありませんでした。母には、10代の後半、20代、30代に分けて、何度もレズビアンであることをカミングアウトしています。はじめのうちは、信じようとしてくれないというか、男性と恋愛する努力もしなさいと言われてたり、「聞きたくないかった。しばらく連絡くれるな」と言われたこともあります。いろいろあったのですが、子どもがほしいと思ったときに、それを母に話したところ、初めてギクシャクがとまったというか、「子どもを持つことはすごくいいことだから、ぜひ産みなさい」というふうに言ってくれました。さすがにカミングアウトして10年も経っていましたしね。弟にははっきり言ったことはなく、子どもが生まれた後に話したのですが、私がレズビアンであることにはずっと気づいていたみたいです。私が子どもをつくると聞いて、びっくりしつつも、「いいと思う」と即答してくれました。

パートナーの両親には、授かる前に説明すると、ちょっと心配させてしまいそうだったので、授かった後に言いました。

LGBTの友人たちにも伝えたんですが、意外と反応はまちまちで、「すごくいいと思う」と言ってくれた人も、複雑な顔をした人もいました。レズビアンの中には、男性とセックスせずに生むとしても、ちょっと気持ち悪いと正直に言った人もいました。あと、実際は男性と婚姻生活を送っているレズビアンも結構いるんですね。そういう人たちで、明らかに不愉快という反応をした人もいます。「子どもを生むっていうこと、育てるっていうことはそんなに簡単じゃない」といわれましたね。それは、すごくショックでしたけれど、あとになって、その人が、自分の子どもを育てるために婚姻を維持しているという背景を持っていたからこそ、そういう発言になったんだろうなと考え、気持ちを収めたということがありました。



仙波: 次の質問です。精子ドナーはどのように探しましたか。

青山さん: インターネットで検索してみたところ、アメリカの精子バンクから精子を取り寄せて、日本の生殖医療の病院で人工授精で授かったという方のブログを見つけ、それを熟読しました。パートナーに相談したら、自分の考えとしては、バンクではなくて、実際に知っている人から提供してもらいたいと言いました。彼女は提供者のデータだけでなく、人となりとかがわかっていて、それを子どもにしゃべってあげられることが大事だし、会おうと思えば会えることを重要視していました。じゃあ、具体的に探そうと、「友情結婚」という言い方をしますが、ゲイとレズビアンが友情で婚姻して、社会的には「既婚者」として生きていこうという、出会いのためのサイトがいくつかあるんです。そこに、「結婚はしたくないのですが、子どもをつくらうと思っていて、協力してくださる方はいらっしゃいませんか」「子どもに対してどのように関わるかは、話し合いで決めましょう」と書き込みました。そしたら意外なことに、何人もご連絡を下さいました。メールのやり取りをして、危険じゃないと確認できた人と会ってお話をして、でも最終的にドナーになってくれた人に決めるまで、丸2年くらいかかりました。カップルの方もいましたし、シングルの方もいましたし、20代から40代の様々な方がいました。でも最終的に私がドナーと決めた人は、会ったときから、ものすごく話がはずんで、お互いの仕事の話とか、価値観もとても似ているなと思いました。実は、ドナーが自分の親にカミングアウトしているかどうかは、結構重要だと思っていました。ゲイだけれど、女性と協力して、子どもをつくるんだよと親に説明しないと、子どもが生まれたときにどうなるか心配だったんです。だから、はじめのうちは、親へのカミングアウトを条件として考えていたんですが、結果的には、私のドナーになってくれた人は、そうではない人でした。それでもなぜ、その人にしたかという、コミュニケーションを大切にすると、意見がすれ違ったときでも、話し合いで一致させていったり、譲りあったりすることができるタイプの方だなと思って、それが一番の決め手だったと思います。



仙波: ドナーが決まってから、妊娠までのご経験について、少しお話しください。

青山さん: 仕事の都合もありまして、妊活をはじめられたのは35歳からだったんです。まずはシリンジ法をほぼ一年間やりました。それで授からず、彼(ドナー)と二人で不妊治療の専門の病院にかかりまして、

タイミング指導を受けました。そのときは、事実婚のカップルですと言いました。タイミング法を半年しても授からず、人工授精に切り替えて、6回トライしても授からず、覚悟を決めて、体外受精にトライし、2回目の移植で着床しました。丸3年かかりました。

その間、毎月の期待と落胆を3年繰り返すうちに、「LGBTという、本来自然に授からない人間が子どもをつくろうと思うこと自体がダメだからなんじゃないか」などと考えて、落ち込んだりもしました。養子とか、里親制度についても調べました。正直その時点で、その二つの可能性がもう少し高かったら、こんなに苦労して、不妊治療しなかつたらうなと思っています。私は、自分の血縁の子どもにこだわっていませんでした。ただ、あの時点では、自分で産む以外に、子どもを持つ道は完全に閉ざされていると感じたんですね。連絡してみることもしなかったです。自分が産めるか、あるいは、子どもを持たないかのどちらかなんだと思っています。

仙波: 青山さんが落ち込んでおられるときに、パートナーの方はどのような感じでしたか。

青山さん: 彼女は子どもを持つことにそれほどこだわっていなかったというのがありますし、二人きりで生きていくのも楽しいのではと思っていたようです。私の心のバランスをとるために、励まし続けていましたね。「いつでもあきらめていいよ、でも、どうせあなたは、自分の意思でしか動かない人だから、自分で決めたときに不妊治療をやめるときだろう」と言っていました。ゲイのドナーのほうも私と似ていて、思い込んだら、ひたすら努力し続けるタイプだったんですよ。よくも3年間付き合ってくれたなと思います。今考えると、途中でパートナーチェンジをしてもよかったと思うんですよ。なんで思いつかなかったんだろう。いや、思いついたんです。でもその時点では、その人との絆も深く、この人の子どもを生みたかった。そういう人に思えたから、がんばった気もします。二人とも、降りる(やめる)と言わないまま、努力し続けてしまったという感じです。



仙波: 次の質問にいきます。お子さんが生まれたときのことを少しお話ください。

青山さん: いよいよ授かりまして、本当に飛び上がって喜びました。その日は、3人ですきやきを食べましたね。すばらしいハッピーエンドだと思ったんです。彼とは、だんだん友情も深まってきたし、たとえば、近くに住んだりして、月に1回とか、なんなら週末毎とか会ったり、子どもと一緒に育ててもらってもいいよね、というようなこともしゃべっていたんです。私もそういうふうに若干、期待していたんですが、妊娠したときから、彼がとても迷いはじめましてですね。それまで彼は、親へのカミングアウトを保留にしていたんですが、いざ、親に子どものことを言うのか、会社にどう伝えるのかとか、認知するのかとかを考えたり、子どもがどう感じるんだろうと考えはじめると、すごく不安になったようです。「やっぱり結婚しよう、子ども

のために」などと言い出しました。かなり、気持ちが揺れ動いてしまって、あれは今考えれば、彼なりのマタニティブルーだったと思います。数ヶ月経つ間に、「やっぱり僕は、ゲイのくせに、子どもをつくるなんて、子どもに対してひどいことをしたと思う」みたいなことを言い始めて、私としては、何を言っているかわからないみたいな感じでした。

後になって考えてみると、私が妊娠したときに、私の周りには3年間の不妊治療を見守ってくれていた友人ばかりだったので、もう100%、「おめでとう」という反応だったんです。はじめに話したときには反対していた人すら、「よかった、よかった」と言ってくれたんです。でも彼は子どもを持つとトライしていることを誰にも言っていなかったので、ゲイの友人に話したら、「(ゲイが子どもをつくるなんて)なんということをしたんだ、お前は」と言われたそうです。たぶん、彼のゲイの友人は、みんな自分のセクシュアリティを秘密にしている、ゲイライフというものを表の顔から切り離している人たちだったんだろうだろうと思います。そういう反応とかが、彼を怖がらせていたんだろうなと思うんですね。

最終的に、彼は私たち二人に精子提供しただけという立場で、一切子どもに関らないで生きていきたいと言いました。私もそのときは、妊娠していて、心が不安定だったので、相方(パートナー)に全権委任して、彼に会いに行ってもらいました。相方は彼に、「あなたの望むとおりでいいです。でも、もともと私たちは子どもに父親のことを話してあげるのが希望なので、子どもに対して自分の存在を言わないでほしいというのは受け入れられない。私たちは絶対に子どもに本当のことを話すつもりだから、あなたの存在についても言いますし、あなたがどういう人か話します。それに、いつか子どもが望んだら、会って欲しい」とお願いしてくれました。そうしたら、彼はひとつだけ条件があると言いました。そして、子どもが、自分の授かり方やこの世界でLGBTがどんな状況があるのかをわかるようになって、親がゲイとレズビアンであると理解したうえで、それでもお父さんと会いたいと言ってくれたら、そのときは会う、とってくれました。私もそれで、彼女と女二人だけで、子どもを育てるんだという覚悟を決めました。

正直、私のパートナーはうれしそうでした。というのは、パートナーは3年間の不妊治療中に、私・彼女・彼がいるとき、絶対に私と彼がカップルだと周囲から思われてしまう。そのことに傷ついていたのだそうです。自分もわかっていて、そういう風にしたんだけれども、すごく割り切れない気持ちになっていたのだそうです。子どもが生まれたあと、4人で出かけたなら、「あっ、あなたたちがこの子のお父さんとお母さんなのね。で、この方はどなた?」と、絶対に周りから見られるだろうと、内心、不安に思っていたみたいです。「これで、はっきりと自分が親だと見てもらえるから、うれしい」と、そのとき初めて言ってくれました。

出産のときは、病院に、「この人(相方)は子どもと一緒に育ててくれる人なので、出産に立ち合わせてほしい」と説明して、ずっとそばにいてもらいました。生まれた翌日に、ドナーの彼が来てくれて、私も初めて顔を合わせたのですが、「この一回だけ、子どもに会う」とわざわざスーツを着てきてくれました。子どもを抱っこしてくれて、1時間ほど3人で子どもを間に挟んで話をしました。その時まで、私は、正直、何だかんだいって、面倒臭くなったんじゃないか。彼のゲイライフに子どもが邪魔になったんじゃないかなと思ってたんです。でも、子どもを目にした彼の表情が愛に満ちていて、本当に愛に満ちていて、本当は関わりたいという気持ちがひしひしと伝わってくる表情で、「私にはまったく納得がいかないけれども、この人は、『この子にとって自分がいけないことがいいのだ』と思い込んでいなくなるんだ」と、初めて腑に落ちました。私もパートナーも泣きましたね。お預かりしますと。3年間一緒に苦労して授かった子どもを、生まれたその日に手離さなければならない、本当につらかったでしょう。ですから私たちは、き

っと息子を偏見のない子どもに育てて、彼がいつか会ってくれるように育てたいと思っています。



仙波：では、異性婚以外のカップルでの子育てで大変なこと、同性パートナーが抱えた困難などについてお話しください。

青山さん：私の働く今の部署は、子持ちで働いている女性が非常に多く、同性パートナーとの子育てだから苦しいというのは、ほとんど感じたことはないですね。共働きの夫婦の家事分担、育児分担の大変さと同じです。私からするとそうなんですけれども、実はパートナーは私とは違って、ものすごく大変なことだということが、その後わかりました。

パートナーにとっては、自分の産んだ子ではなく、私と婚姻しているわけでもない。いわば他人の子を善意で育てているだけに見えるのです。その時点では、レズビアンであることを会社では秘密にしている状態だったので、彼女は、子育てがたいへんでも、それを会社に説明できなかったんですね。彼女としては、二人で授かった子どもだから、一緒に子育てをしたい。だけど、それまで残業がし放題だったのが、17時に確実に退社して、保育園に行きたいと同僚に説明することが、特に繁忙期だったりすると、なおさら難しい。周囲してみれば、「同居している女性が生んだ子どもと一緒に育てています」って、単なる奇妙なお友だちにしか見えないんですよ。私のほうが収入が多かったり、多忙だったこともあって、子どもが何度も風邪をひいて、病児保育に預けられなかったりすると、本当は彼女に子どものことをお願いしたかった。でもそれができなくて、彼女は私に対しても、会社に対しても申し訳ないと感じたようです。それが度重なって行って、たまたま彼女の親の介護の問題も降りかかってきて、気がつくやうに、パートナーが口を開くと、ごめんなさい、ごめんなさいと言うようになってしまったんです。そして、あっという間に、もう本当に数ヶ月の間に鬱を発症してしまいました。たまたま彼女は人事部にいたおかげで、周りが鬱に対しての知識があったので、なんかおかしいというふうに気づいてくれて、すぐに産業医に相談して、明日からもう出勤しなくていいとなりました。かなり早い時期に出勤停止になったので、丸2年間の休職ですみました。でも、その間、彼女は闘病で大変でしたし、私自身は、同性パートナーが鬱だということを周りに説明できないんですね。婚姻していないから、彼女を扶養家族にもできない。このまま働けなくなったら、彼女を一生養えるのかとか、不安だらけでした。子どもの調子が悪いときにも、パートナーはずっと寝ているんです。子どものご飯のことや面倒をみることも一切考えられなくなるんです。子どもが1歳半とか2歳の頃、悪魔のような反抗期の子どもを抱えて、週末は朝9時から夕方6時まで、子どもと二人で水族館に行ったり、博物館に行ったり、一生懸命時間をつぶして、パートナーを一人にしてあげました。それはそれは大変な2年間でした。

ただ幸いなことに、だんだん復調して行って、リワークプログラムに通いはじめ、その中で、「カミングアウトをしようと思う。会社に戻るとき、カミングアウトしないのは無理だということがわかりました」と言いだ

したのです。カミングアウトされた周囲は、最初は戸惑っていたけれども、半年間顔を合わせているうちに、どんどんアライアンス(理解者・支援者)になっていったそうです。ちょうどその頃は、タイミングもよくて、渋谷区や世田谷区で同性パートナー登録が始まったことが、ニュースなどでも取りあげられていました。それを見た人が、朝の朝礼とかで「よかったね」と言ってくれたり、カミングアウトするときも、「最近話題のあれです」というと、みんながわかっていて、LGBTのことをいちいち説明しないで済んだ。ラッキーだったと言っているくらいですね。

彼女がオープンになっていったので、家庭内で私と彼女のカミングアウトに対する姿勢が大きくずれてしまいました。私は実はそれまで、会社にカミングアウトすることを考えたこともなかったんです。ただ、彼女が日々、生き生きとしてくるのを見て、ふうふとして、この温度差はまずいんじゃないかなと思いました。それで、会社の信頼できる人たちにいきなり10人くらいにカミングアウトしました。上司とか、組合委員長とか、同僚とかに言ってみて、そうしたら、みんな、「ああ、これからもよろしく」という反応をしてくれて、有難かったです。組合委員長なんかは「今までこの問題に気づかなくて、申し訳ない。うちの会社にもLGBTに対応するように働きかけましょう。」と言ってくれました。これまでのうちの会社の就業規則では、子どもが生まれたり、結婚したり、パートナーの親が死んでも、もしくはパートナーが亡くなったとしても、彼女は友人扱いなので、有給を消化して休まなければならなかったんです。介護が発生したときも、LGBTパートナーのため、もしくはパートナーの親のための介護休暇はとれませんでした。でも、人事局長に面談を申し込んで、そうしたことに対応してもらえることになりました。



仙波: 次の質問です。お子さんには出生についてどのように説明していますか。

青山さん: ずっと、ありのままに言おうと思っていたんですけど、幼い子どもには精子とか言ってもよくわからないので、どうしようと思ったんです。はじめは、1歳のときに、お友達から「Kちゃんのパパはなんでいないの?」と聞かれたところから始まりました。で、「そういうおうちもあるのよ。うちはパパいないけど、だけど、うちにはYちゃん(パートナーの愛称)がいるの」と返すと、みんなきょんとしていましたね。あと街中で、私たち二人が子どもを連れて歩いていると、よく、「お父さんはどこにいるの?」と聞かれるんですよ。それが私もうざいんですけど、子ども自身もうざかったらしくて、自分から「ぼく、パパはいないけど、Yちゃんがいるんだー」と言うようになりました。言われたほうもポカーンとしていて、「そうなのねー」という感じです。最近では、息子が「Yちゃんは男の子なんだよね」って言い始めて、「男の子じゃない、女の子だよ」って答えました。

「両親は女の人と男の人のセットのはず」と思ったからなんでしょうね。次は、「ぼくんちはお母さんがママで、お父さんがYちゃんなんだよね」と言い出しました。これはまあ、お父さんとは違うけど、「両親」という認識では正しいので、「そうだね」と言いました。

あと、「パパはどこにいるの？パパはいないんだよね？死んじゃったんだよね」と息子が聞いてきたこともあって、「死んでいません。生きています」と話すと、ビックリしていました。最近私が「Kちゃんはママのお腹から出てきたんだよね。でも、Kちゃんはね、ずーっとママのお腹に入ってくれなくて、Yちゃんと二人で、3年も『Kちゃん、早く、ママのお腹に来て』って言ってたんだよ。それで、やっときてくれて、生まれてきたんだよ」と話をしたときに、はじめて臍に落ちたみたいで、すごくうれしそうな顔をしていました。最近、息子はよくこんなことを言います。「ぼくがいつまでも来てくれなかったときに、ママなんて言ったの？」というようにです。あと、「ぼくが出てきたときに何て言った」とか、「ワーンワーンって泣きました」みたいな話とかですね。自分が望まれて生まれたきたというエピソードは、何度聞いてもうれしいようです。



仙波：現在の精子ドナーとのご関係はどうですか。

青山さん：直接会ったのは出産のときが最後で、それっきりなんですけれども、数ヶ月にいつかは子どもの写真をメールで送って、最近スイミングを始めましたとか、こういうことをしゃべるようになりましたというような近況を報告しています。年に一度、息子の誕生日にバースデーカードが届きます。それを見て、愛してるんだったら、会っちゃえばいいじゃないと私なんかは思います。「生まれる前に言っていたことは、もう全部忘れちゃいなよ。息子、かわいいよ」と、言ってみたこともあるのですが、「息子がかわいいから、会えないんです」という返事がきて、これを見て、私のほうからは言うまいと思いました。正攻法で息子本人が大人になるしかないんだなと思っています。



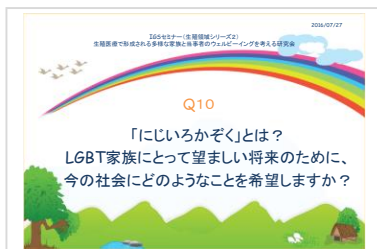
仙波：職場とか、保育園、それからご近所には家族のことをどのようにお話していますか。

青山さん：職場には言ったり、言っていなかったりなんですけど、なんかかんやで、だんだんばれつつあるので、最近飲み会のたびにフワッとカミングアウトしています。保育園へは、子どもが5カ月から預けているんですけど、当時は守りに入って「シングルマザーですが、同居している女性がいて、一緒に育ててくれております」と説明しました。「まあ、なんと有難いんでしょう」と先生たちがおっしゃって、覚悟していた反応と違っていました。彼女が子どもを保育園に連れていくと、「本当にありがとうございます」と先

生たちに言われてですね、「いえいえ、そんな」とか言っていたんですけど、一ヶ月も経つと、送り迎えが、私と彼女が半々というより、むしろ、彼女のほうが多かったです。先生も、もしかしてこの人も同じ立場で「親」なんじゃないかと気づいたようです。毎年担任が変わるんですけども、申し送りされていて、色々説明しなくても、親として扱ってくれるようになりました。今年の春に園長が変わったんですけども、非常時の電話連絡網にうちの相方も入れてくださいと言いに園長室に行ったら、園長先生は知らなくてきょんととして、主任が「後で話しておきます」と言ってくれて、「話が早いわ」と思いました。

去年、相方が鬱になった時に、誰よりも早く気づいたのは、実は保育園の先生だったんです。私が保育園に行ったときに、「あの一、最近、Yさん(パートナー)、お元氣くないですか」と声をかけてくれて、「実は休職したんですよ」と言ったら、園長先生が教務室に招きいれて、話を聞いてくださいました。「がんばって支えていきます」という話をしたら、ため息をついて、「ご夫婦みたいなものですな」と言ってくれたんです。「はい、そうなんです」と言ったら、その場にいた先生たちが、「あーっ」ってなんか、臍に落ちた感じになって、レズビアンという言葉を一回も出したことないんですが、伝わっているなど、いう状態でした。

あと、ご近所には、実はうちのマンションはすごく変わっていて、全住戸、非常に仲がよくて、年に何回か家族全員で飲みに行くんです。私が妊娠した段階で全員に一斉送信で、「私、子どもができました。相方と育てます。」とメールしたら、全く想像のついてなかった人からは、「何ごと!？」という反応がありましたけれど、なんとなく、私たちをカップルだと察していた人からは、「おめでとう。素敵な家族だね」と返事がきました。生まれてからもすごくかわいがってもらって、「一緒に小学校に行くのを楽しみにしているよ」と言われています。一緒に登校班で行けるんじゃないかなと思っています。



仙波:では、私のほうから、最後の質問です。にじいろかぞくのことを少しご説明ください。それからLGBTの家族についての望ましい将来のために、今の社会にどのようなものがあればいいか、そういうことについてもお話しください。

青山さん:にじいろかぞくには、私のようなLGBTのライフスタイルのなかで子どもを授かろうとした家族(デノボファミリー)だけでなく、過去の結婚とかで子どもを授かっていて、今はLGBTのパートナーというステップファミリーや、トランスジェンダーで子育てしている家族がたくさんいます。マスコミに取り上げられるときに、デノボファミリーのことばかりに焦点が当てられがちなんですけれども、実はそれ以外の家族もすごく多いんですね。にじいろかぞくは、非常にゆるく活動している団体で、子どもの来歴は問わず、親のセクシャリティや、性別も問わず、セクシャル・マイノリティで親であるという人たちが子どもを育てる上での悩み事とか喜びを共有できる場所です。なかなかありのままの自分たちでいられる場がないという家族も多いので、ここでは思いきりしゃべりましょうという場でもあります。将来的には、私たちに育てられている子どもたちが、子ども同士でつながっていけるように活動していきたいと思っています。子ど

もを授かろうとしたとき、まさか 2016 年がこんな状態になっているなんて期待していませんでした。授かった 2011 年ですら、全く想像していなかった未来に今はいて、いずれは同性婚も認められるかもしれないと希望があります。この先、息子が小学校・中学校とかにあがっていったときに、苦しい思いをしないように、にじろかぞくのメンバーとして活動できたらと思っています。



仙波: それでは、みなさんのほうから何かご質問があれば、お受けします。

質問 1: 親御さん、パートナー、精子提供者のこともなんですが、両親に孫が生まれるという面で、両親とどういう関係を築いていきたいとか、こういう関係になっていますというのがあれば教えてください。

青山さん: わりとごく普通の、おじいちゃん、おばあちゃんです。精子提供者は、結局子どもが生まれたことを親には言っていないので、私の母、兄弟、パートナーの両親、兄弟が「親戚」にあたりますが、自分たちに新しい親戚ができた、孫ができたというふうには考えていると思います。いとこたちとも、楽しく遊んでいますね。そうですね、本当に普通です。私と彼女はそれまでも家族だったんですけど、うちの母と弟は、私に子どもが生まれたことで、「ホッとした」といいました。それは、このユニット(家族)で、この先も生きていくんだなと思えたからだだと思います。それまでは、結婚もないし、婚姻制度もないし、身内としてはやっぱり不安というか、私自身が不幸になるのではないか、いずれ独りになるんじゃないかということが一番心配していて、子どもができたことで、それが少し目に見える形になって、安心できたという感じです。パートナーの両親もそうだったんじゃないかと思っています。

質問 2: お伺いしたいのは嫌な話なんですけれども、子どもを授かるまでに、診療機関にいくらくらい支払ったかと、どちらが負担したかと、ドナーを選択するにあたって、これもお金の話になってしまうのですが、経済状態とか、雇用形態とか、あとから、ろくでもない男からゆすられたりとか、たかられたりとか、そんな心配はありませんでしたか? そんなことを知りたいと思います。

青山さん: 最初の質問ですが、実は私たちは完全に経費をシェアしていました。私のほうから半額だして欲しいとは求めませんでしたが、彼自身も子どもがほしい気持ちが強く、その子に早く会いたいから、技術でその日が近づくのなら、お金のかかる体外受精もやりたいと言ってきて、ああ、ありがとうございます

す、助かりますという感じでした。

提供者選びの時には、やはり、人間的信頼性にもものすごく気をつけましたね。ただ、そこで経済力とかは考えませんでした。外見や学歴については、私のほうから確認したことはなかったです。コミュニケーション能力が一番重要でした。というのも、もともと私たち二人で育てる覚悟だったので、経済的な負担を求める気はなかったからです。ただ今になって考えてみると、子どもの父親が超落ちぶれてしまい、「養ってくれ」と、子どもに頼ってくるリスクがあることは否定できませんが、そういう意味では、彼はちゃんとした人だと思います。経済負担についても、一切受け取っていません。これらはカップルそれぞれで事情が違いますので、あくまでも私たちの場合としてお聞き下さい。

質問 3: I want ask questions in English, and please translate for me. Thank you for showing information and things are very important for public to know more about LGBT families. In Taiwan we have LGBT families right promotion group, publish books to show Lesbian how to build families so we want to share with you. My question for you is social policies. In many countries, there are policies to promote single woman or lesbian to use the sperm banks and also ... I wonder that medical clinics have some discrimination against LGBT people to use the medical service. So I wonder whether the Japanese government or a medical authority has any policies to support LGBT community to build families. In some countries its illegal that lesbian use sperm banks.

青山さん: 少し前までは、日本でも、精子バンクを使って妊娠をしたというカップルもいたんですが、ここ数年、受け入れをしてくれる医療機関が減って、かなり難しくなっているようです。公には確認してないんですけども、これまでは引き受けてくれるお医者さんがいくつか国内に点在していたんですが、ちょうど2年くらい前の秋くらいから、バンクをつかって精子提供をしていていた病院が、来月からできなくなりましたと断ってきたとかを、ちょくちょく耳にするようになっていきます。これには妊娠を希望する人たちは皆、本当に困っています。リアルな提供者と協力して子どもを持つには、それだけコミュニケーション能力が必要で、関わる大人も多くなってトラブルになる可能性も増える。かといって一方で、バンクが簡単に使えていいのかという問題もあります。これはヘテロセクシャルの方が、精子バンクから取り寄せる場合でも同じことがおきているだろうということを推測しますね。個人的には、できれば使えるようにしていただきたいと希望しています。

質問 4: こういう状況下で子どもを授かると決断されたときに、私たちが生きている普通の環境で、今、お子さんを育てていらっしゃるみたいですが、より同性愛に理解のある国がほかにもありますよね。そうした色々な環境が選択できる中で、日本での環境を選択したきっかけとか理由があったら教えていただきたいと思います。

青山さん: どうなんでしょう。考えたことがなかった。実際、ゲイカップルで海外に住んでいて、海外で代理母をつかって、子どもを授かって、海外で子育てをしているという方もいらっしゃいますが、現実問題、私はすごく日本に根付いてしまっているので、海外にいて、つらぬくということは、考えなかったですね。一方で、子どもをもたないという選択肢も全然なかったんですね。

質問5: にじいろかぞくのメンバーさんのなかで提供精子、提供卵子を使いたいという人で、匿名のドナーさんがいいですという方もいらっしゃるんですか。

青山さん: あえて、匿名のドナーを選んだという人は、私の友人の中にはいないですね。中にはもちろん、いるのだと思いますが、友人はだいたいオープンドナーを選んでいきます。バンクを使った人と、リアルな友人や知り合い、親族などに提供してもらったという人がいますが、それはいろいろ立場や考え方があると思います。バンクを選んだ方というのは、自分とパートナーの二人を「両親」として、子どもを育てたい、そこに集中したいという思いがある場合が多いかな。あと、子どもの出自に男性が関わったという事実をあまり意識したくないというふうに思われている方もいらっしゃいます。

質問6: ドナーさんのほとんどは、無償で受けてくださる方なんですか。それともやっぱり報酬をお支払いする方というのもしらっしゃるのですか。

青山さん: 友人や知り合いでは、報酬を払ってという例は聞いたことがありません。あと、身内から提供を受けたという人もいますね。パートナーの弟とか、親戚とか。それは、もめないためでもあるし、のちのち身近な人間関係のなかで育てられるみたいなものもあって、そうなるとうまます報酬は発生しないと思います。